立山町文化財調査報告書　第30冊

五郎丸遺跡

―第2・3次発掘調査報告書―

1999年

立山町教育委員会

序

文化財は祖先の営みを私達に伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく、現在の文化を理解するためにも重要なものです。なかでも埋蔵文化財は地域の歴史に深く関係しており、郷土をよりよく理解するための鍵であるといえましょう。

このたび調査の行われた五郎丸遺跡は、過去の調査で古代・中世の資料が数多く出土し、古くから拓けた集落であることが確認されました。

今回の調査でも、古代を中心に数多くの遺物が出土し、常願寺川扇状地扇端部における古代・中世の開発状況をより詳しく知るための貴重な資料が得られました。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

終わりになりましたが、調査実施に当たり御協力をいただいた富山県と地元や諸方の皆様に衷心より感謝申し上げます。

平成11年３月

立山町教育委員会
教育長　堀　田　　實

例　　言

1．本書は立山町第２五郎丸企業団地の造成に先立つ、富山県中新川郡立山町五郎丸遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は立山町教育委員会が実施した。

3．現地調査は、第２次調査が平成８年11月11日～同年12月６日の延べ12日間、第３次調査が平成９年４月21日～同年８月４日の延べ44日間に行った。その後、報告書作成は平成11年３月31日までに行った。発掘面積は3,800㎡である。

4．調査事務局は立山町教育委員会に置き、社会教育課主事三鍋秀典が事務を担当、社会教育課長開上寛（平成８年）、奥村忠彰（平成９年）が総括した。

5．調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典と立山町教育委員会学芸員柴垣智子、立山町教育委員会臨時調査員新本真之・中島義人である。

6．調査にあたり、富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センターから有益な御教示をいただいた。古代及び中世の土師器については宇野隆夫氏（富山大学教授）に御教示をいただいた。記して謝意を表します。

7．遺物の注記は「TGR」とし、次にグリッド名・層位・日付の順に付した。

8．遺物整理・実測・製図は三鍋・新本が中心となり、河合忍・田中幸生（富山大学大学院生）、三浦智徳・磯村愛子・砂田晋司・遠野いずみ・渡辺樹・表原孝好・片桐清恵・川端良招・不嶋美穂・的場茂晃・山口欧志（富山大学学生）が協力した。

9．本書の編集・執筆は三鍋・新本が担当した。

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1
Ⅱ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅲ　調査概要 …… 4
　1．立地と層序 …… 4
　2．遺　　構 …… 4
　3．遺　　物 …… 5
Ⅳ　調査成果 …… 17
　参考文献
　写真図版

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第2図　調査区区割図 …… 3
第3図　調査区全体図 …… 折込み
第4図　遺物実測図 …… 6
第5図　遺物実測図 …… 7
第6図　遺物実測図 …… 10
第7図　遺物実測図 …… 11
第8図　遺物実測図 …… 12
第9図　遺物実測図 …… 13
第10図　遺物実測図 …… 14
第11図　遺物実測図 …… 16

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43㎞、南北21㎞、面積は308㎢である。

地勢は、三角州や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぶ多様な地形が、標高約10ｍから3,000ｍにかけて展開している。東南部には立山を主峰とする北アルプスの山々が連なり、中央部はそこから続く山地丘陵もしくは河岸段丘、北西部が平野部である。

このため、自然環境も変化に富んでおり、植生の面からは大きく４区分できる。

標高400ｍ以下は暖温帯の照葉樹林帯に属し、かつて重要な食料資源であったカシ類が多い。

これに続いて標高600ｍ～700ｍまでは暖温帯の落葉樹林帯に属し、カシ類にまさる食料資源であるクヌギ・コナラ・クリ類の成育帯で、シカ・イノシシ・ウサギ等の動物が育つ場でもある。

さらに標高1,500ｍまではブナ類の茂る冷温帯落葉樹林帯、1,500ｍ以上は亜寒帯針葉樹林帯となっている。

今回調査を行った五郎丸遺跡の所在する町北部地域は、常願寺川扇状地の扇端部にあたる。遺跡は、現在の五郎丸集落とその周辺を含み、高野川左岸の微高地上に位置する。

周辺には縄文時代から中・近世に至るまで、ほぼ切れ目なく遺跡が存在する。

これらの遺跡の中で、今回調査を行った遺跡に関連のあるものとしては、曽我遺跡（縄文）、利田横枕遺跡・日水遺跡・鉾ノ木Ⅰ遺跡・横沢Ⅰ遺跡（縄文～近世）、横沢Ⅱ遺跡（縄文・古代～近世）、利田堀田遺跡・利田高見遺跡（古代～中世）、総曲輪遺跡（古代～近世）などがあげられる。

Ⅱ　調査に至る経緯

遺跡は、以前から多くの縄文土器が採集されており、『立山町史』には五郎丸地区での遺物の散布状況が記載されている。

平成４年度、五郎丸第２企業団地造成に関する申請が提出された。これを受けて立山町教育委員会が試掘調査を実施し、旧河川跡や柱穴などの遺構と多数の遺物を検出した。

第１次調査（平成６年度）

一昨年の試掘調査結果をふまえて、建物にかかる敷地約800㎡を対象として記録保存調査を実施した。この調査で、同遺跡が古代及び中世の集落跡であることが判明した。

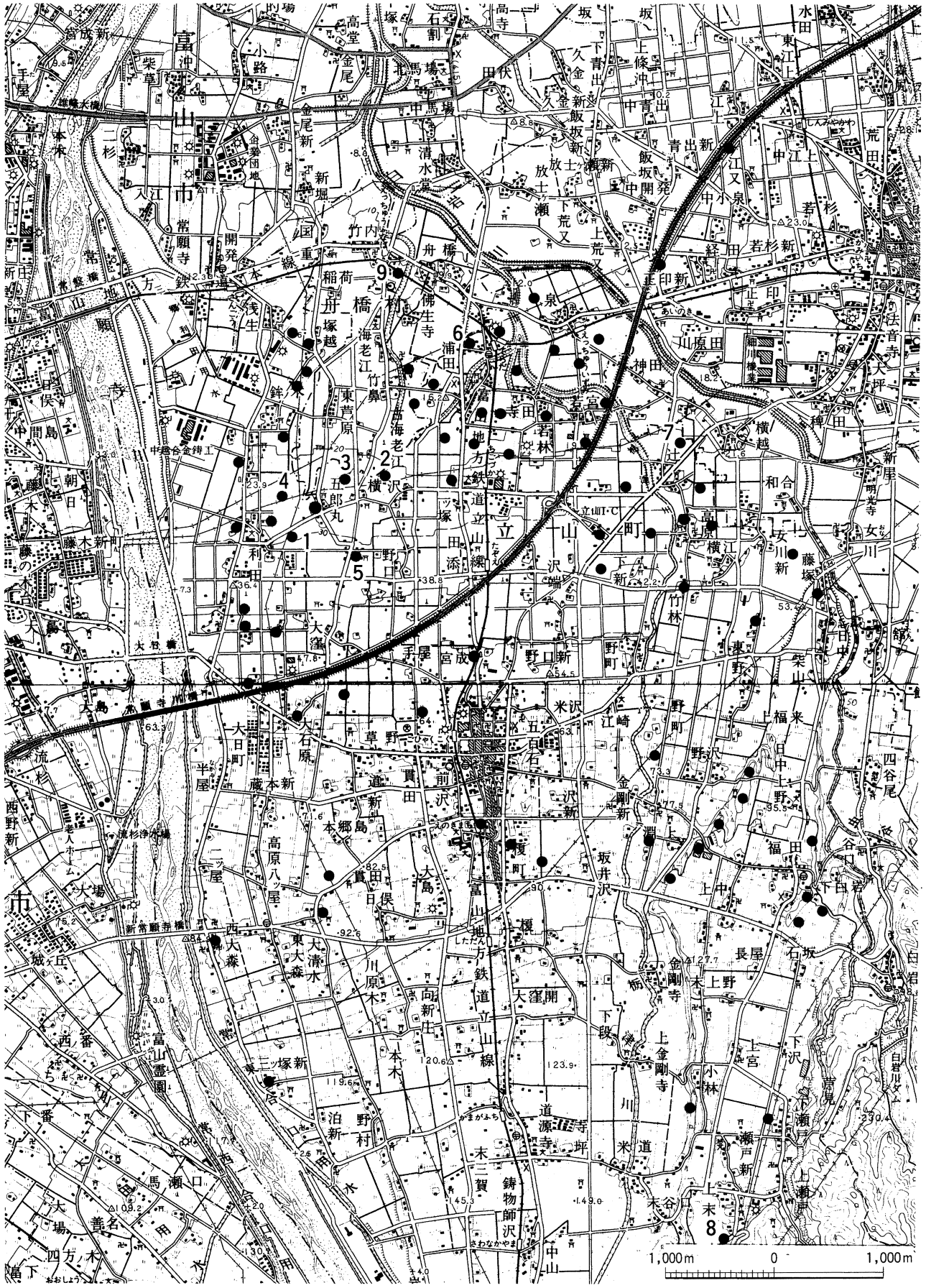
第２次調査（平成８年度）

開発計画見直しをうけ、開発予定地内に広がる遺跡全体（河川跡の西側）の記録保存調査を２年間をかけて実施することを決定した。初年度の調査面積は約1,000㎡、調査期間は11月11日～12月６日の延べ12日間である。

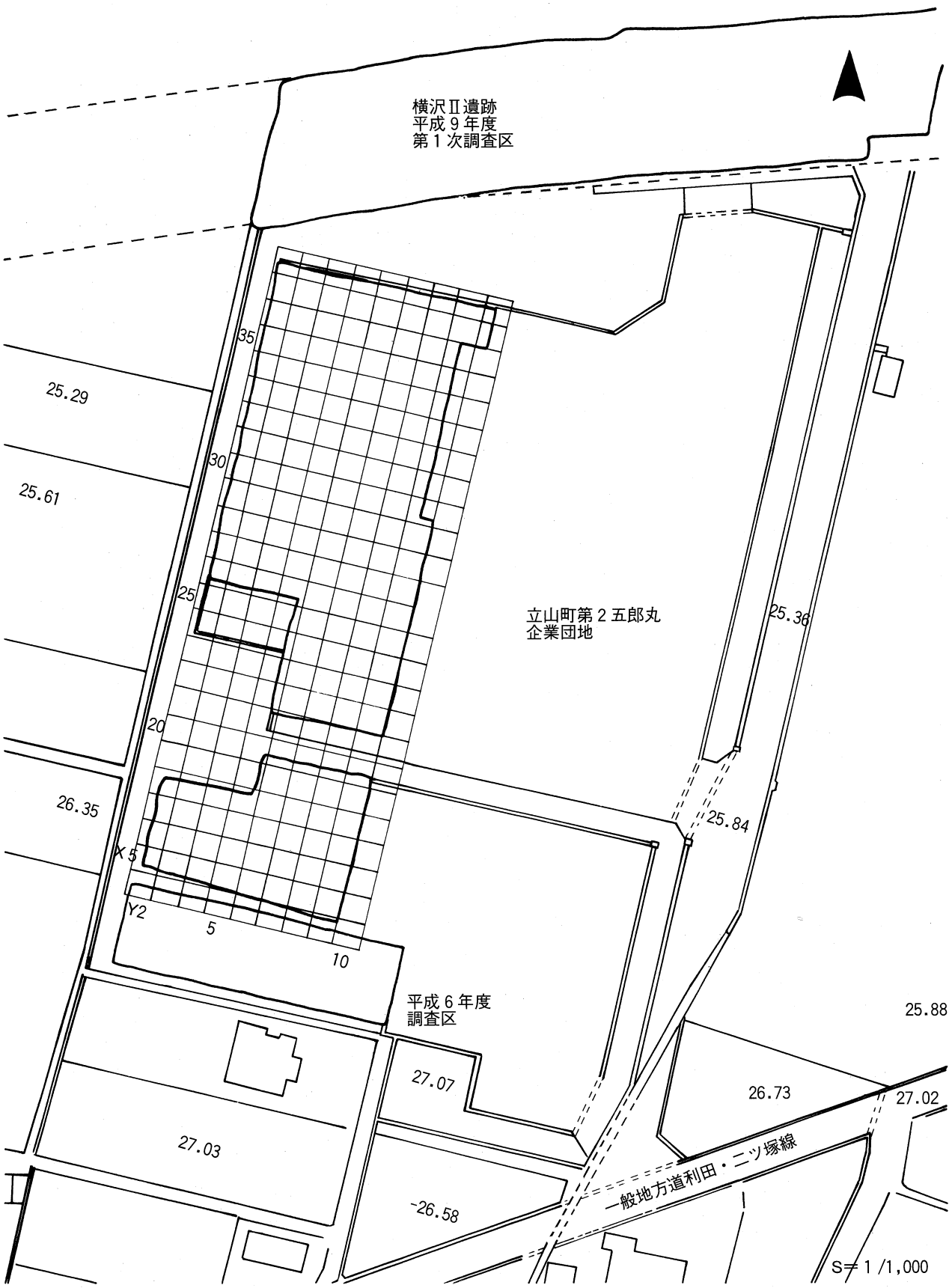
第３次調査（平成９年度）

昨年に引き続き開発予定地北半の記録保存調査を実施した。調査面積は約2,800㎡、調査期間は４月21日～８月４日の延べ44日間である。

（三鍋）



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡　１．五郎丸遺跡　２．横沢Ⅰ遺跡　３．横沢Ⅱ遺跡　４．利田横枕遺跡
５．日水遺跡　６．浦田遺跡　７．辻遺跡　８．上末古窯跡群　９．仏生寺城跡


横沢Ⅱ遺跡
平成９年度
第１次調査区
35
30
25
20
25.29
25.61
26.35
X 5
Y2
5
10
立山町第２五郎丸
企業団地
25.36
25.84
平成６年度
調査区
27.07
27.03
26.58
26.73
25.88
27.02
一般地方道利田・二ツ塚線
S＝1 /1,000

第２図　調査区区割図

25.00m
Y5
X28
X27
X26
X35
X25
X24
X23
X22
流路2
流路1
X21
X30
X20
X19
X18
X17
X16
25.50m
X15
X14
礫層露出面
X13
X12
25.50m
X11
0
10m
X20
X10
X9
X8
流路2
X7
SK01
X6
X5
Y2
Y3
Y4
Y5
Y6
Y7
Y8
Y9

第3図　調査区全体図

Ⅲ　調査概要

1．立地と層序（第2・3図）

五郎丸遺跡は、富山地方鉄道越中舟橋駅の南２㎞、立山町五郎丸に所在する。一帯は、常願寺川扇状地の末端部湧水地帯にあたる。遺跡の東側一帯には高野川・栃津川などの中小河川が流入して、三角州・小支谷・自然堤防等の複雑な地形を形成している。

遺跡は高野川左岸の小支谷によって開析された微高地上に立地する。遺跡の規模は、昭和62年に実施された分布調査で南北310ｍ、東西290ｍにわたって広がっていることが確認されており、標高は27ｍ前後である。調査対象地区は水田として利用されていた。

層序は、第１層・黄褐色土、第２層・暗茶褐色土、第３層・暗オリーブ褐色土、第４層・黒褐色土、第５層・黄褐色土の順で堆積している。暗茶褐色土層は平均30㎝、暗オリーブ褐色土層は20～40㎝で西側ほど厚く、黒褐色土層は20～30㎝の厚さで堆積している。

第４層・黒褐色土が遺物包含層であり、遺構内の堆積土も基本的には黒褐色土である。

2．遺構（第3図）

流路１

調査区東側で検出された。南北に走る大溝で、さらに調査区外へと延びていることから、1994年度調査区の流路１へとつながるものと考えられる。東壁に切られているため正確な幅は不明であるが、幅広な地点では13ｍを越える。深さはＸ７～９ラインで極端に浅くなり、X20ラインでは80㎝を測る。

覆土は、第１層・黒褐色土、第２層・暗茶褐色土、第３層・茶褐色土の順で堆積している。

遺物は、第２層から縄文土器（第４図９）が、第１層から縄文土器（第４図８・11）・須恵器杯Ａ（第７図62）が出土している。

流路２

調査区の西半で検出された。北西から南へと緩く弧を描きながら走る大溝で、さらに調査区外へと延びていることから、1994年度調査区の流路２へとつながるものと考えられる。幅は2.5ｍ～12ｍを測り、深さはX＝20ラインで1.5ｍを測る。

覆土は、第１層・黒褐色土、第２層・茶褐色土の順で堆積している。

遺物は、第１層から須恵器杯蓋（第６図32）・須恵器杯（第８図74）・土師器甕（第10図93）が出土している。

SK01

調査区の南半、Ｘ５、Ｙ４・５区で検出された。平面形態は長方形を呈し、長軸3.8ｍ・短軸1.5ｍを測る。断面形態は皿状で、深さは10㎝を測る。

覆土は、黄褐色土混じり暗褐色土の単層で、須恵器杯蓋（第６図33）が出土している。

また、東西に走る３本の小溝と重複している。

3．遺物（第４図～第11図）

⑴　縄文時代の遺物（第４図１～第５図24）

縄紋時代の遺物は、後期後葉から晩期に属するものがほとんどであり、調査区北東隅のX26～28・Ｙ５～９区の黒褐色土層及び流路１を中心に出土している。

土器（第４図１～第５図19）

８・９・11は流路１からの出土、1は表面採集、その他は遺物包含層からの出土である。

中期前葉（第４図１）

１は深鉢の胴部破片で、縄文地文の上に半裁竹管で直曲線を施す。真脇遺跡に類例が見られ、新崎式に比定できる。

後期後葉（第４図２・３）

２は肩部で強く屈曲し、口縁部は内傾しながら外反して波状を呈する。口縁部には４条の平行沈線を施し、肩部には磨消しによる無文帯が巡る。

３は口縁部が内屈し、大小４単位ずつの波状口縁を持つ深鉢である。小波状の下部には口縁を巡る３条の沈線とそれを寸断する縦位の短い隆帯を張り付け、隆帯の中央には縦位短沈線を施す。肩部には磨消しによる無文帯が巡り、その下端には２条の沈線を施す。外面にはススが付着している。

後期末葉（第４図４～６）

４は胴部が屈曲して口縁がほぼ垂直に立ち上がり、端部で強く外反する浅鉢である。口縁端部には連続刺突文を施し、口縁部には背向弧文とそれを寸断する５条の縦位短沈線を施す。外面にはススが付着している。

５は口縁部が波状を呈する異形土器で、手焙り形土器の可能性を持つ。口縁部には５条の縦位弧線や隆帯を施し、口縁の一部と胴部の縄文地文を磨り消している。内面は丁寧に研磨している。

６は胴部が屈曲し、口縁部は内傾する浅鉢で、口縁部には３条の沈線を施し、屈曲部の直上には斜位の短沈線が巡る。

晩期中葉（第４図７・８）

７は胴部が屈曲して口縁がやや外傾して立ち上がる浅鉢で、口縁部には縦横の隆帯を施し、それらに区画されるように上下２沈線間に横長の列点文を施す。口縁部内面下端には１条の沈線が巡る。

８は口縁部が「く」の字状を呈する深鉢で、上半が緩やかに張る胴部を持つ。頸部の２条の沈線間に列点文を施し、肩部には磨消しによる無文帯が巡る。胴部上半には沈線や列点文、上放弧文・下放弧文を施す。胴部外面にはススが付着している。

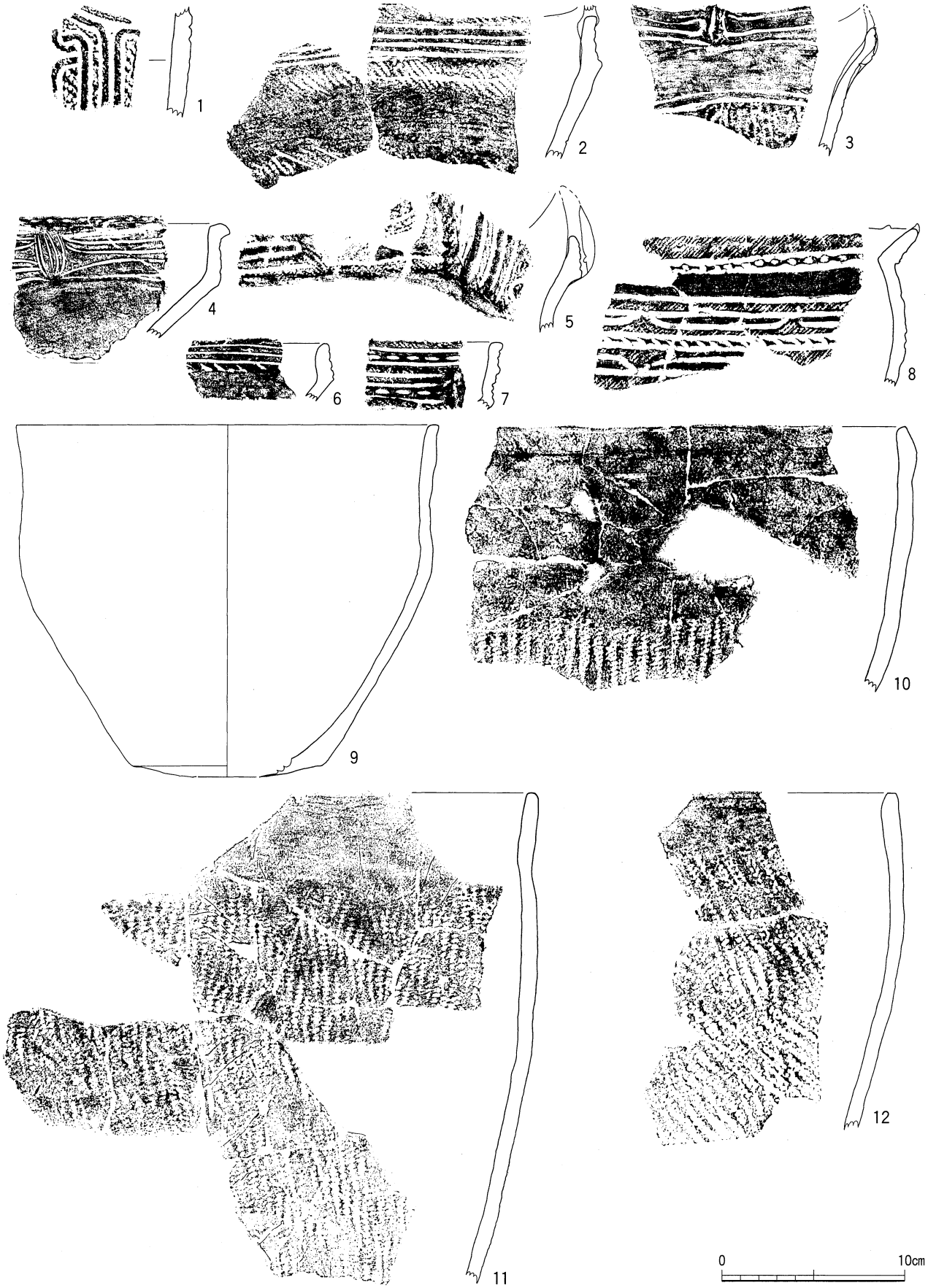
粗製土器（第４図９～12、第５図13～16）

９は無文の鉢で、口径23㎝、器高20㎝を測る。

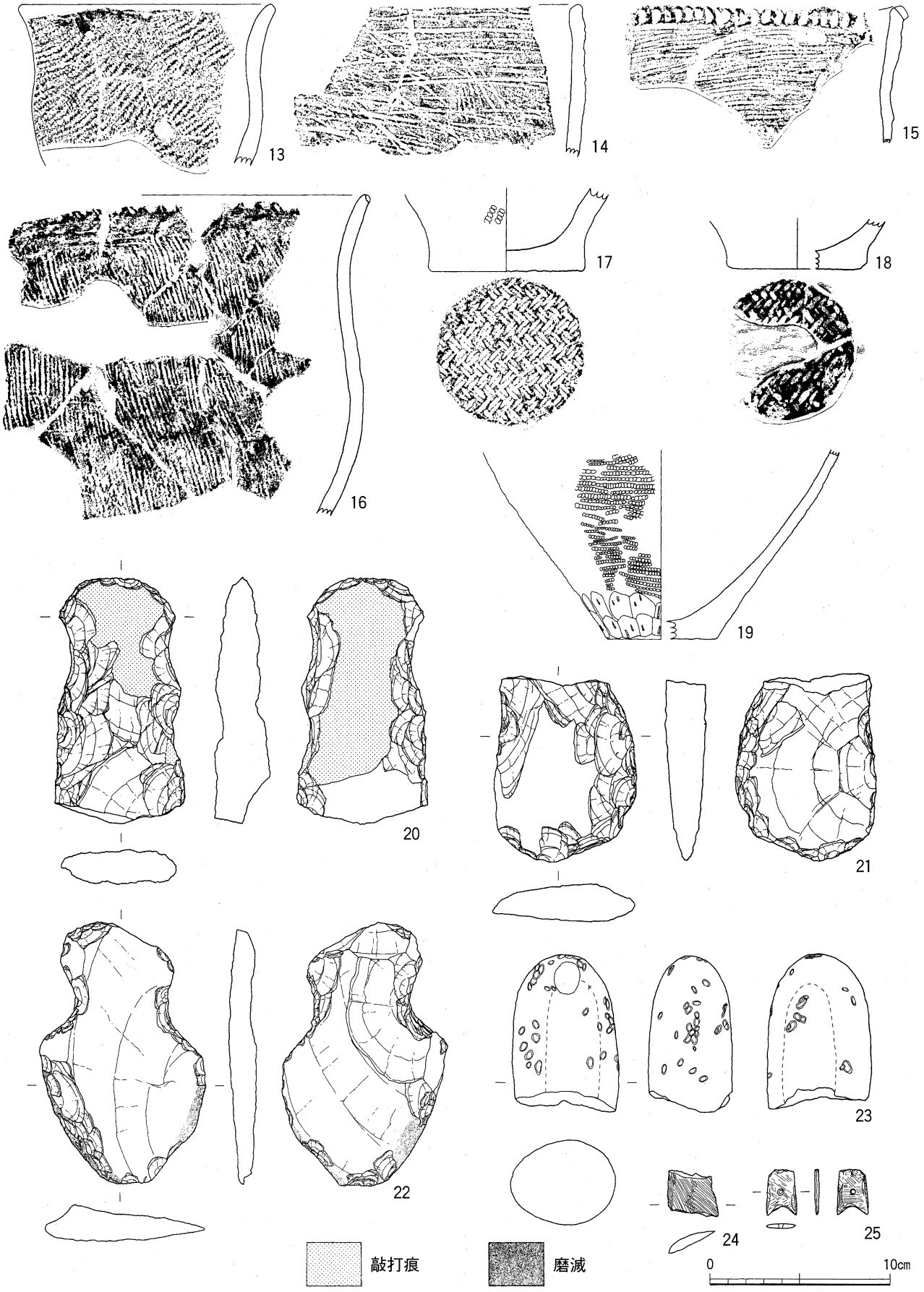
10～12は縄文地文の深鉢で、口縁部を磨り消して無文とする。10・12は口縁部が内湾し、11は口縁部が外傾する。また10の無文部は幅広で、11・12は幅狭である。富山県滑川市本江遺跡深鉢Ｐ類に類似し、後期後葉に属する可能性が高い。

13は縄文地文の深鉢で、口径は14㎝を測る。外面にはススが付着している。

14～16は条痕地文の深鉢で、15は巻貝、16は二枚貝を原体とする。15・16は口縁端部に斜方向の刻みを施し、外面にはススが付着している。



第4図　遺物実測図　8・9・11．流路1　1．表採　その他．遺物包含層



第5図　遺物実測図　遺物包含層

土器底部（第５図17～19）

土器底部は全て網代圧痕のもので、木葉圧痕・スダレ状圧痕のものは確認できなかった。17は「３本越え２本潜り１本送り」型式で、18は「２本越え１本潜り１本送り」型式のものである。19は横位縄文を地文とし、胴部下端にケズリを施すことから天王山式に属する可能性がある。

石器（第５図20～24）

20・21・24は流路１から、他は包含層からの出土である。

打製石斧（第５図20～22）

20は安山岩製で、平面形は短冊型を呈する。残存長12.5㎝、最大幅7.2㎝で、刃部を欠損する。

21は凝灰岩製で、平面形は短冊型を呈する。残存長8.2㎝、最大幅7.8㎝で、基部を欠損する。

22は頁岩製で、平面形は分銅型を呈する。最大長14.5㎝、最大幅９㎝で、側縁は使用により摩滅している。

磨石（第５図23）

23は砂岩製で、残存長8.6㎝、最大幅5.8㎝を測る。先端及び両側面付近に敲打痕を有する。

磨製石斧（第５図24）

24は蛇紋岩製で、形態は定角式である。基部、刃部ともに大きく欠損しており、表面には無数の掻痕を残す。

⑵ 弥生時代後期～古墳時代初頭（第５図25）

弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物は、有孔磨製石鏃１点のみである。粘板岩製の無茎凹基鏃で、残存長2.5㎝、最大幅1.7㎝を測り、刃部を欠損している。管見の限り、富山県内での磨製石鏃の出土は布目沢北遺跡例のみであり、有孔磨製石鏃の出土は初例と考えられる。

⑶ 古代の遺物（第６図～10図）

古代の遺物は、8世紀後半～９世紀前半に属するものが大半を占め、調査区中央X16以北を中心に出土している。また、土器の調整技法には、ハケメ調整・ヘラミガキ調整・ナデ調整・ヘラケズリ調整などがあるが、以下の記述では「調整」を省略し、単に「ハケメ」「ヘラミガキ」「ナデ」「ヘラケズリ」……と記す。

須恵器（第６図～第９図）

杯蓋・杯・壺・瓶・甕がある。

杯蓋（第６図26～51）

32は流路2、33はSK01からの出土、50は表面採集資料、その他は遺物包含層からの出土である。

26・27は宝珠形のつまみを持つ蓋で、頂部外面に回転ヘラケズリを行ったのち、ロクロナデを施す。26の焼成は軟質である。

28～33は天井部が平坦で、口縁部との境に段を持つ。口縁端部の断面は、28が丸みを帯びた三角形を呈し、29は折り曲げ、30～32は外反する。28は肩部に回転ヘラケズリを施す。29は頂部外面に回転ヘラケズリを施した後、全面にロクロナデを施す。31は頂部外面に回転ヘラケズリを行ったのち、ナデを施す。32は縁端部の外面に自然釉がかかる。33は頂部と肩部に回転ヘラケズリを施す。

34～41は天井部が丸みをもって緩やかに口縁部に至る。口縁端部の断面は、34～38が三角形を呈し、39～41は外反する。34は宝珠形のつまみを持ち、頂部に回転ヘラケズリを施したのち、全面にロクロナデを施す。35は全面にロク

ロナデを施す。36は肩部に回転ヘラケズリを施し、縁端部外面に自然釉がかかる。37は頂部と肩部に回転ヘラケズリを施し、縁端部外面に自然釉がかかる。38は頂部に回転ヘラケズリを施し、外面全体に自然釉がかかる。39は肩部に回転ヘラケズリを施す。40は頂部と肩部に回転ヘラケズリを施し、焼成は軟質である。41は頂部に回転ヘラケズリを施したのち、全面にロクロナデを施す。

42～49は天井部が丸みを持ち、口縁部との境に段がある。口縁端部の断面は、42が三角形を呈し、43～47は折り曲げ、48・49は外反する。42は頂部と肩部に回転ヘラケズリを施す。43は頂部を糸切りしたのち、頂部から肩部に回転ヘラケズリを施す。44は頂部と肩部に回転ヘラケズリを行ったのち、全面にロクロナデを施す。45は縁端部外面に自然釉がかかる。49は頂部をヘラ切りしたのちロクロナデを施す。

50・51は全体に扁平で、口縁端部の断面は三角形を呈する。50は低平でボタン状に近い宝珠形のつまみをもち、頂部から肩部に回転ヘラケズリを施す。51の焼成は軟質である。

これらの蓋の内面の調整はいずれもロクロナデである。

26～51は8世紀第4四半期から9世紀第1四半期のものと考えられるが、43は9世紀後半の可能性もある。

なお口径が計測できたのは23点で、11㎝台のものが2点、12㎝台のものが8点、13㎝台のものが7点、15㎝台のものが4点、18㎝台のものが1点、19㎝台のものが1点である。

杯（第7図52～67・第8図68～82）

第7図52～60は杯Ｂで、いずれも遺物包含層からの出土である。

高台はすべて貼り付けており、高台端面の傾斜は、53・55が内傾し、その他は水平である。体部は内外面ともにロクロナデを施す。底部は54・57は回転ヘラ切り後、ロクロナデとナデを併用し、その他はロクロナデを施す。60の体部外面には自然釉がかかる。

52～60はいずれも8世紀後半から9世紀前半のものと考えられる。

口径が計測できた破片は6点で、12㎝・13㎝・15㎝台のものが各2点ずつである。

第7図61～67は杯Ａで、62は流路1から出土しており、その他は遺物包含層からの出土である。

体部内外面にはすべてロクロナデを施し、62・64～67の底部は回転ヘラ切りしたのちに不定方向のナデを施す。

いずれも8世紀後半から9世紀前半のものと考えられる。

口径が計測できた破片は4点で、11㎝台が1点、12㎝台が3点である。

第8図68～82は杯口縁部破片で、74は流路2から出土しており、その他は遺物包含層からの出土である。

調整は内外面ともにすべてロクロナデを施す。78～82は法量が大きく、杯Ｂの可能性が高い。78の体部外面には自然釉がかかる。

いずれも8世紀後半から9世紀代のものと考えられる。

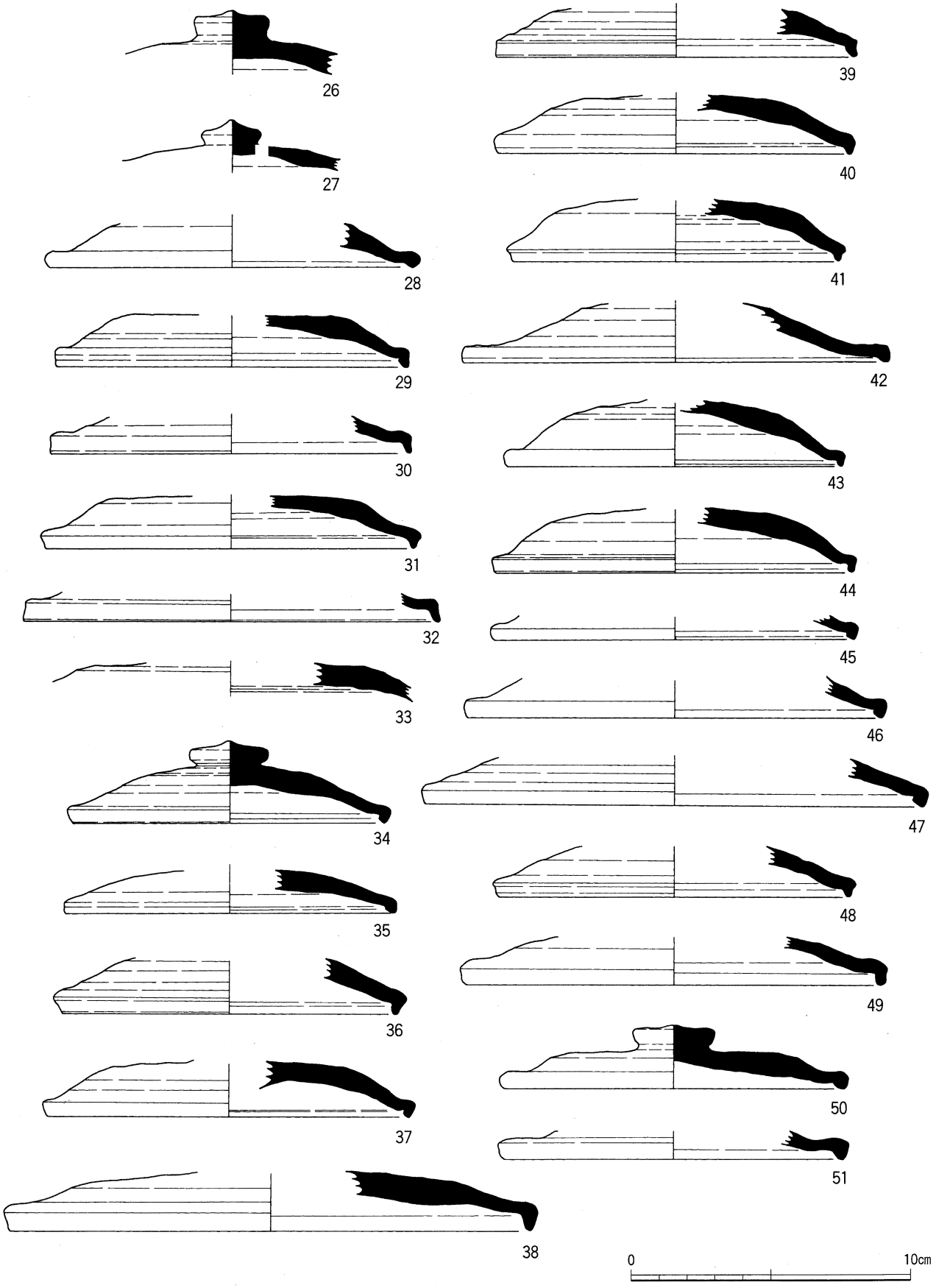
口径が計測できた破片は15点で、11㎝台が6点、13㎝台が5点、14㎝台が1点、15㎝台が2点、22㎝台が1点である。

壺（第9図83～85）

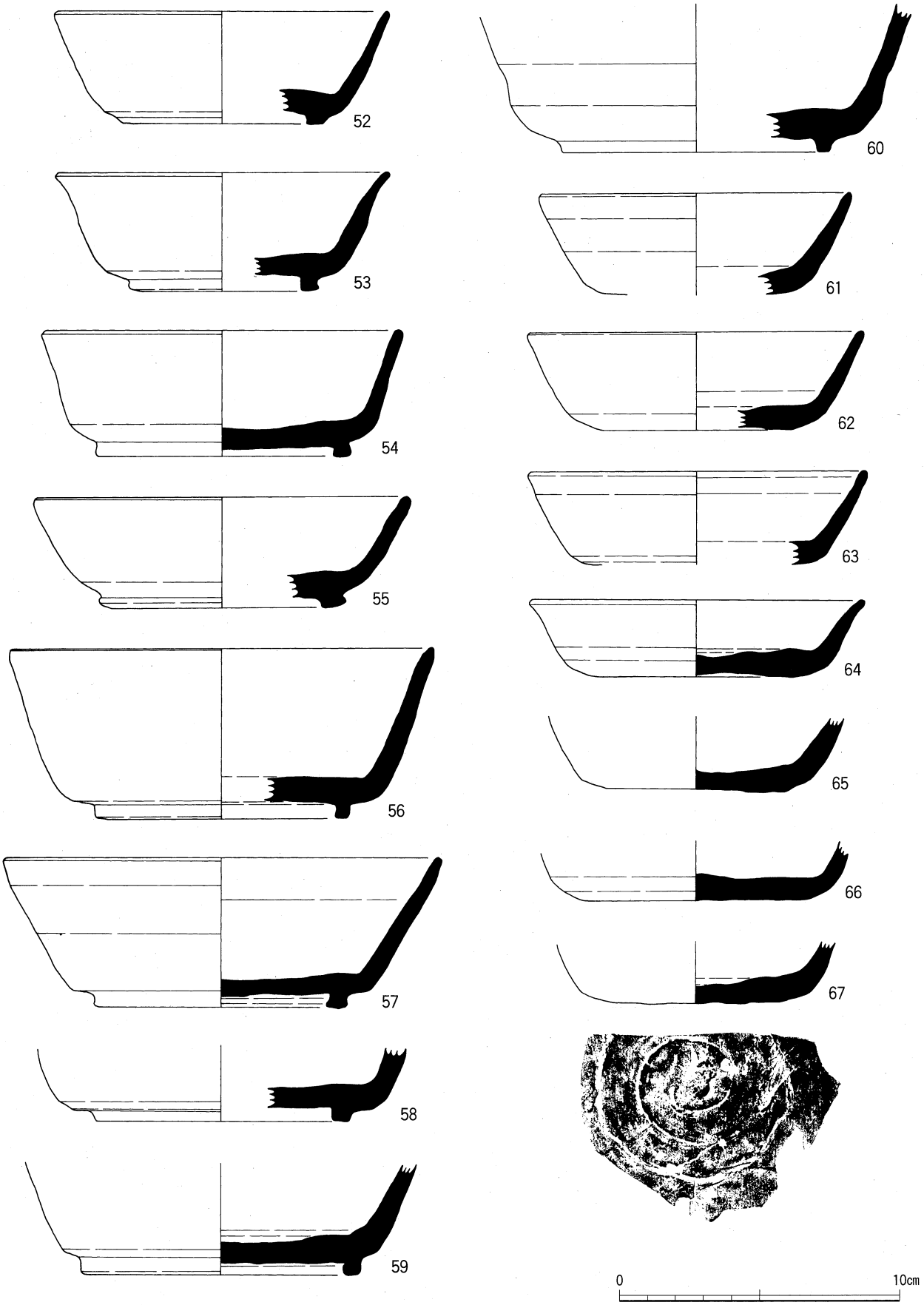
すべて遺物包含層からの出土である。

83は壺の口縁部で、内外面にロクロナデを施し、口径は10㎝を測る。84は壺の底部で、底部内外面はナデを施し、体部内外面にはロクロナデを施す。高台は八の字形に開き、下端接地面が平坦で、高台径は12.4㎝を測る。85は直口壺で、体部外面には3㎝あたり8条の格子状叩き目、内面には同心円文を施す。口縁部内外面と体部外面に自然釉がかかっており、口縁部の調整は不明である。口径は13.6㎝を測る。

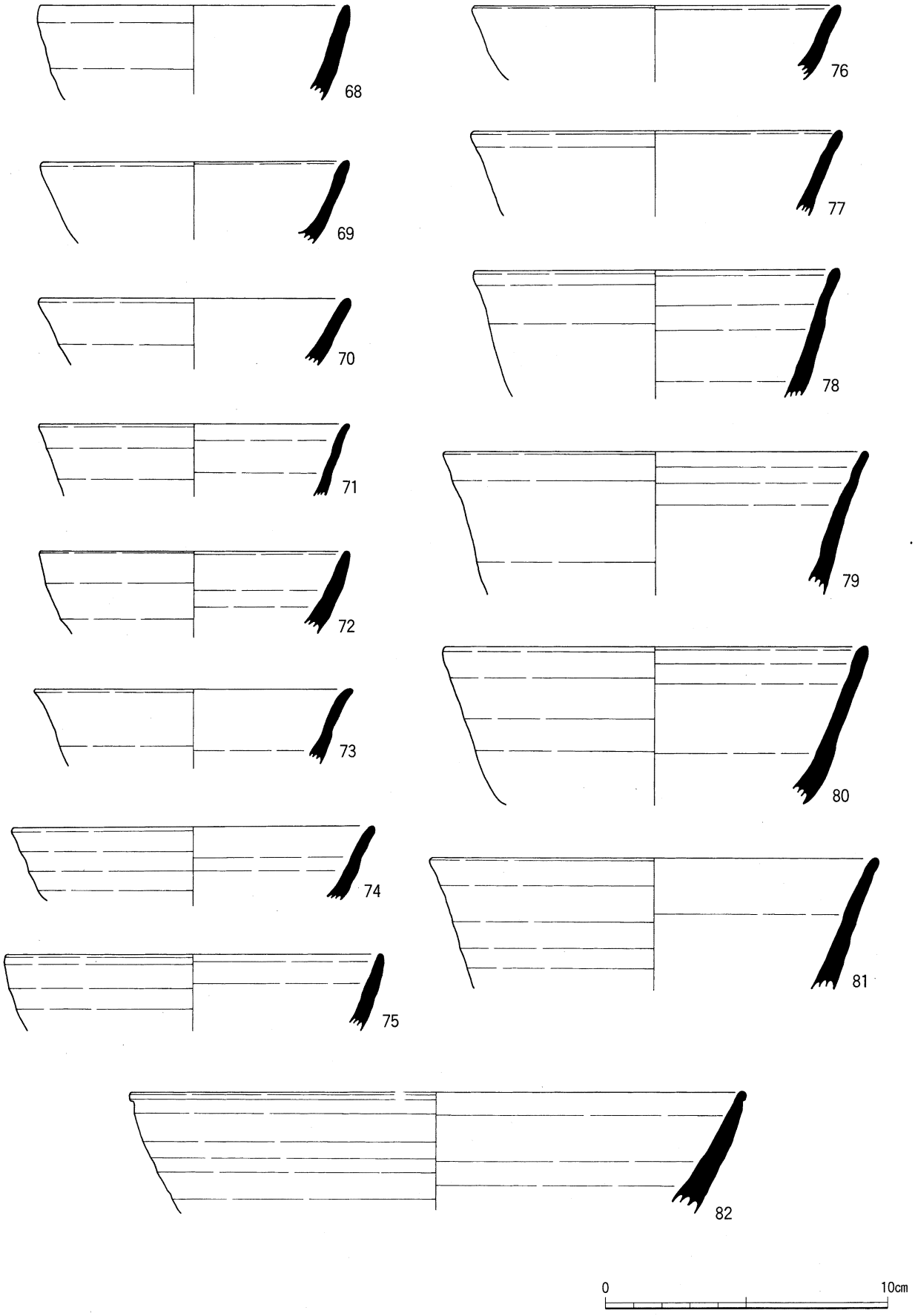
83は9世紀第1四半期、84は8世紀後半から9世紀前半、85は9～10世紀の上末窯製品には格子状叩き目がほとん



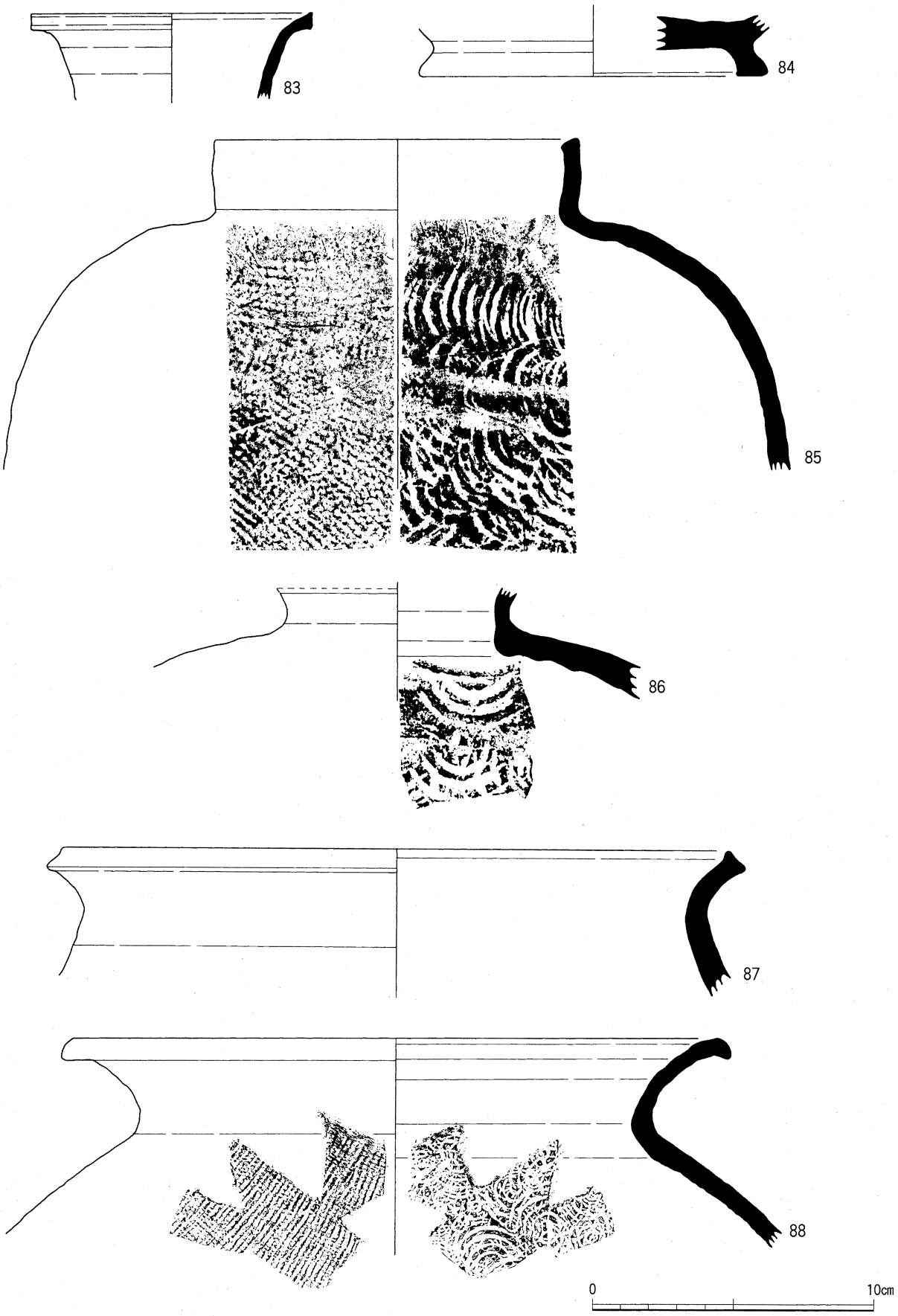
第6図　遺物実測図　32．流路2　33．SK01　50．表採　その他．遺物包含層



第７図　遺物実測図　62．流路１　その他．遺物包含層



第８図　遺物実測図　74．流路２　その他．遺物包含層



第９図　遺物実測図　遺物包含層

ど見られないことから、8世紀代のものと考えられる。

瓶（第９図86）

86は横瓶の頸部から肩部にかけての破片で、遺物包含層からの出土である。体部外面は摩耗が激しく調整は不明で、内面には同心円文を施す。頸部外面に自然釉がかかる。

甕（第９図87・88）

87・88ともに遺物包含層からの出土である。

87は口縁部破片で、口縁端面が外面とほぼ直角をなしてわずかに内側に肥厚する。内外面にはロクロナデを施し、口径は23.6㎝を測る。88は口縁部から体部上半の破片で、口縁部は外反し、縁端部はわずかに肥厚する。口縁部外面は平行叩き後ロクロナデを施し、さらに２条の波状文を施文する。体部外面には縦方向の平行叩き、内面には同心円文を施す。口径は23㎝を測る。

87は９世紀代、88は８世紀代のものと考えられる。

土師器（第10図89～97）

椀・甕がある。

椀（第10図89）

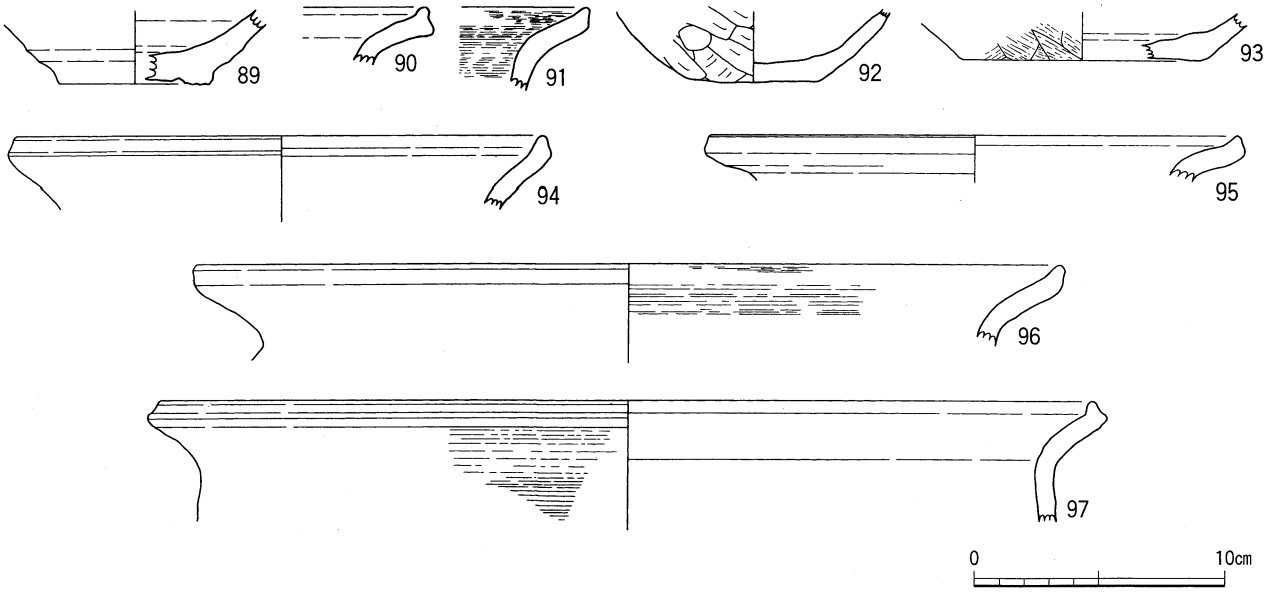
体部から底部にかけての破片で、遺物包含層からの出土である。底部は糸切り無調整で、体部内外面にはロクロナデを施す。９世紀代のものと考えられる。

甕（第10図90～97）

93は流路２から、他は遺物包含層からの出土である。

90・94・95・97は外方に延びた口縁端部をつまみ上げ、斜上方に面取りをする。90は内外面に回転ナデを施す。94の外面は摩滅により調整は不明で、内面には回転ナデを施す。95は内外面に回転ナデを施し、口唇部に炭化物が付着する。97は外面にカキメを施したのち、口縁部に回転ナデを施す。内面には回転ナデを施し、炭化物が付着する。91・96は外傾する口縁を上方に軽くつまみ上げて面取りし、内面にハケメ、外面に回転ナデを施す。96は内外面に炭化物が付着する。92・93は底部破片で、体部外面にケズリを施す。93の底部には糸切り痕が残る。

いずれも８世紀後半～９世紀代のものと考えられる。



第10図　遺物実測図　93．流路２　その他．遺物包含層

(4) 中世の遺物（第11図）

土師器（第11図98～110）

すべて遺物包含層からの出土である。

98は、やや分厚い体部と、若干内湾する口縁部をもつ。全体に摩滅するため、ナデ調整が一段であるか、二段であるかは、はっきりしなかった。12世紀後半～13世紀代のものと考えられる。

99は、やや薄手の体部と、わずかに肥厚する口縁部をもつ。一段のナデ調整を施す。13世紀～14世紀代のものと考えられる。

100は、内湾する体部と、シャープに仕上げる口縁部をもつ。ナデ調整が一段であるか、二段であるかは、はっきりしなかった。12世紀末～13世紀前半のものと考えられる。

101は、内湾する体部と、丸くおさめる口縁部をもつ。内外面ともに二次的な被熱を受けており、全体に煤が分厚く付着していた。15世紀～16世紀代のものと考えられる。

102は、直線的にのびる長い口縁部をもつ。一段のナデ調整を施す。14世紀代のものと考えられる。

103は、内湾する体部と、外傾する口縁部をもつ。二段のナデ調整を施す。13世紀代のものと考えられる。

104は、外反する体部と、丸くおさめる口縁部をもつ。一段のナデ調整を施す。13世紀～14世紀代のものと考えられる。

105は、外反する体部と、シャープに仕上げる口縁部をもつ。一段のナデ調整を施す。15世紀前半のものと考えられる。

106は、強くつままれる口縁部をもつ。二段のナデ調整を施す。13世紀代のものと考えられる。

107は、屈曲する体部と、つまみ上げる口縁部をもつ。ナデ調整が一段であるか、二段であるかは、はっきりしなかった。13世紀前半のものと考えられる。

108は、屈曲する体部と、つまみ上げる口縁部をもつ。二段のナデ調整を施す。15世紀代のものと考えられる。

109は、内湾する体部と、シャープに仕上げる口縁部をもつ。二段のナデ調整を施す。12世紀末～15世紀初頭のものと考えられる。

110は、外方にシャープにつまむ口縁部をもつ。二段のナデ調整を施す。15世紀～16世紀代のものと考えられる。

中国陶磁（第11図111）

遺物包含層からの出土である。

111は、青磁合子身で、丸く内湾する体部をもつ。体部外面には、型押により成形された凸部がならぶ。15世紀代のものと考えられる。

珠洲（第11図112・113）

擂鉢がある。いずれも遺物包含層からの出土である。

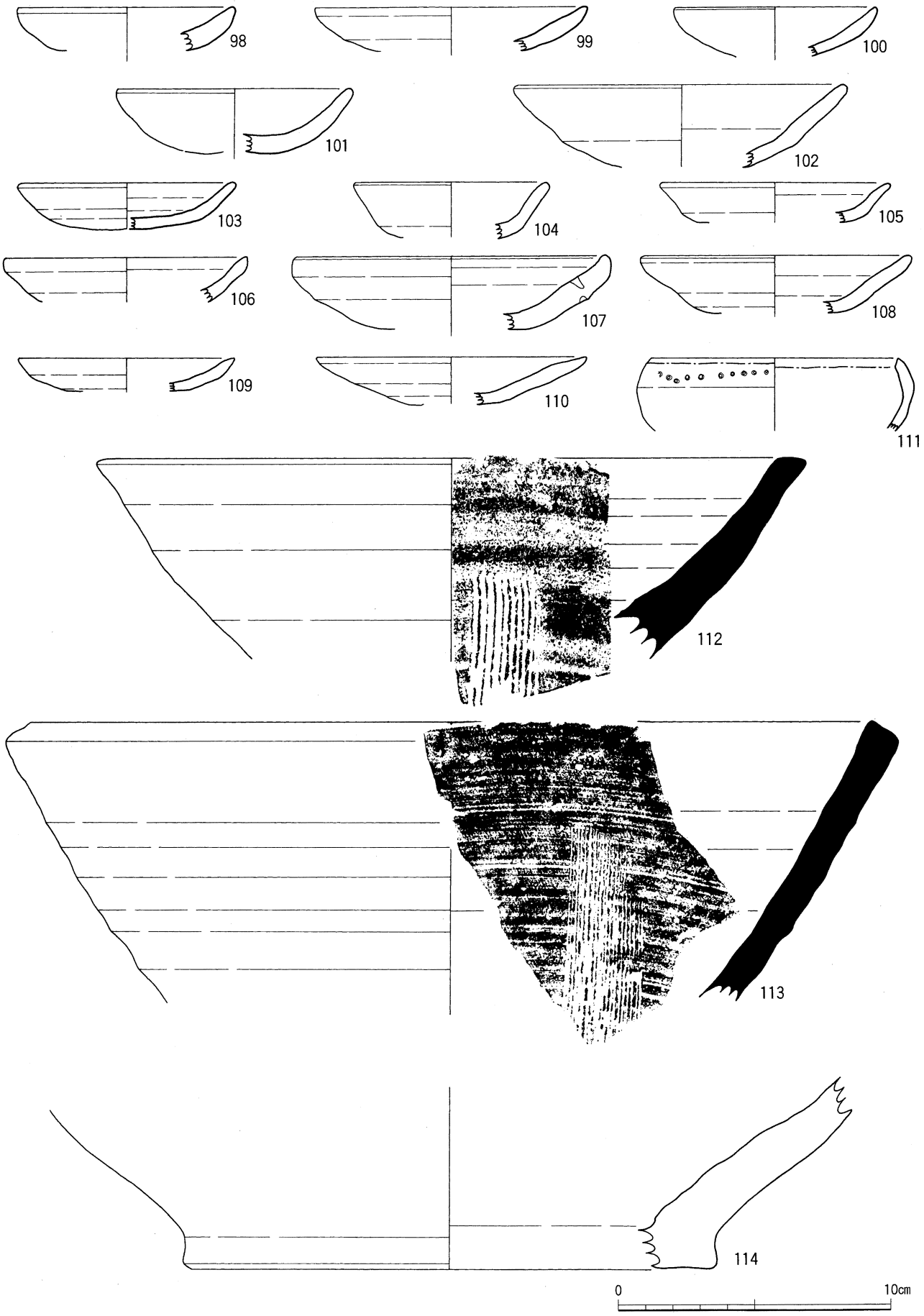
112は、やや外方に開く体部をもつ。卸目は2.2㎝の原体に９条ある。13世紀代のものと考えられる。

113は、やや外方に開く体部と、端面を形成する口縁部をもつ。卸目は2.7㎝の原体に20条ある。13世紀前半のものと考えられる。

八尾（第11図114）

甕がある。遺物包含層からの出土である。

114は、外方に開く体部をもつ。14世紀～15世紀代のものと考えられる。（新本）



第11図　遺物実測図　遺物包含層

Ⅳ　調査成果

第２・３次の調査で得られた新知見は以下の通りである。

1．遺跡は、古代および中世の集落跡と考えられる。ただし、第１次調査地区に比べると、中世の遺物量は激減しており、中世集落に関してははずれにあたるものと推定する。

2．調査区には、南北方向に流れる２本の流路があり、このうち東側の流路が集落の東端を限るものと考えられる。なお、今回の調査地区からは建物などの遺構が全く検出されず、集落域の最外郭部分にあたるものと考える。

3．縄文時代の遺物は、極少量であり、全て流路および遺物包含層からの出土である。後期後～末葉に盛期があった可能性は考えられるが、集落の存在などについては周辺の調査を待ちたい。

4．古代の遺物は、遺構内から出土したものは少なく、ほとんどが流路および遺物包含層からの出土である。
須恵器の時期は８～９世紀代が中心で、特に８世紀後半代から９世紀のものが主流を占める。
土師器は量的には少ないが、時期は須恵器同様に８世紀後半から９世紀代のものが主流を占める。

5．中・近世の遺物は、全て流路および遺物包含層からの出土で、12～16世紀代までのものがあるが、12～13世紀代に量的にピークを持つ。土師器皿・青磁・珠洲焼・八尾焼などがある。

以上の調査成果に、第１次調査（平成６年度）の調査成果をあわせて考察すると、次のような推論が導かれる。

①　遺跡は、古代（８世紀代２四半期～９世紀前半）集落と中世（12～13世紀）集落の複合遺跡である。

②　調査区は、遺構がごく少ないことから、古代中世ともに集落の端にあたるものと考えられる。

③　古代集落は、その存続期間（８世紀代２四半期～９世紀前半）から、「越中国新川群大荊村墾田地図」（767）に名前のみえる「川枯郷」またはその周辺集落である可能性が高い。

④　中世集落は、その存続期間（12～16世紀）から、現在の五郎丸集落の母体となった村であろうと推定する。ただし、この集落と古代集落との間には断絶期間があるため、12世紀（鎌倉時代）に新たに築かれた村であろう。

なお余談になるが、五郎丸集落には現在も『村の名前は曽我五郎によって開墾された故事に由来する。』という言い伝えが生きており、今回の調査によって判明した村の始まりと符合する。歴史的事実が形を変えて語り伝えられた一例といえるのではあるまいか。　（三鍋）

参考文献

イ　石川県埋蔵文化財センター　1989 『金沢米泉遺跡』

ウ　内堀信雄　1988 「須恵器甕類に見られる叩き目文について」『北陸古代土器研究の現状と課題』

カ　加藤三千雄　1988 「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観３　中期Ⅱ』 小学館

上市町教育委員会　1984 『弓庄城跡　第４次緊急発掘調査概要』

狩野睦・酒井重洋　1991 『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編６－境Ａ遺跡土器編』 富山県教育委員会

コ　小島俊彰　1979 「本江遺跡」『滑川市史』考古資料編　滑川市史編さん委員会

小島俊彰　1981 「井口式土器」『縄文文化の研究４』 雄山閣

小林正史　1991 「土器の器形と炭化物から見た先史時代の調理方法」『北陸古代土器研究』創刊号
北陸古代土器研究会

ス　鈴木次郎　1983 「打製石斧」『縄文文化の研究７』 雄山閣

鈴木道之助　1991 『図録　石器入門辞典　縄文』 柏書房

タ　高堀勝喜　1983 『野々市町御経塚遺跡』 野々市町教育委員会

立山町教育委員会　1987 『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』

立山町教育委員会　1988 『浦田遺跡・第２次発掘調査報告』

立山町教育委員会　1990 『辻遺跡・第２次発掘調査報告書』

立山町教育委員会　1991 『辻遺跡・第３次発掘調査報告書』

テ　出越茂和　1995 「Ⅲ北陸」『須恵器集成図録』 雄山閣出版㈱

ト　富山県教育委員会　1982 『小杉流通業務団地内遺跡群　第３・４次緊急発掘調査概要』

富山県教育委員会　1984 『小杉流通業務団地内遺跡群　第６次緊急発掘調査概要』

富山県埋蔵文化財センター　1990 『栗山楮原遺跡　南中田Ａ遺跡　任海鎌倉遺跡　南中田Ｃ遺跡』

富山県埋蔵文化財センター　1990 『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編５－境Ａ遺跡石器編』

富山県埋蔵文化財センター　1991 『南中田Ｄ遺跡発掘調査報告書』

富山県埋蔵文化財センター　1993 『任海遺跡　吉倉Ａ遺跡　吉倉Ｂ遺跡』

富山県埋蔵文化財センター　1994 『吉倉Ｂ遺跡』

富山大学人文学部考古学研究室　1989 『越中上末窯』

ノ　能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　1986 『真脇遺跡』

ノ　能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　1986 『真脇遺跡』

ハ　橋本正・酒井重洋・久々忠義　1980 『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』 井口村教育委員会

ミ　湊　晨　1972 「三、縄文後・晩期」『富山県史』 考古編

南久和　1989 「北陸晩期土器様式」『縄文土器大観４　後期　晩期　続縄文』 小学館

南久和　1992 『金沢市中屋サワ遺跡』 金沢市教育委員会

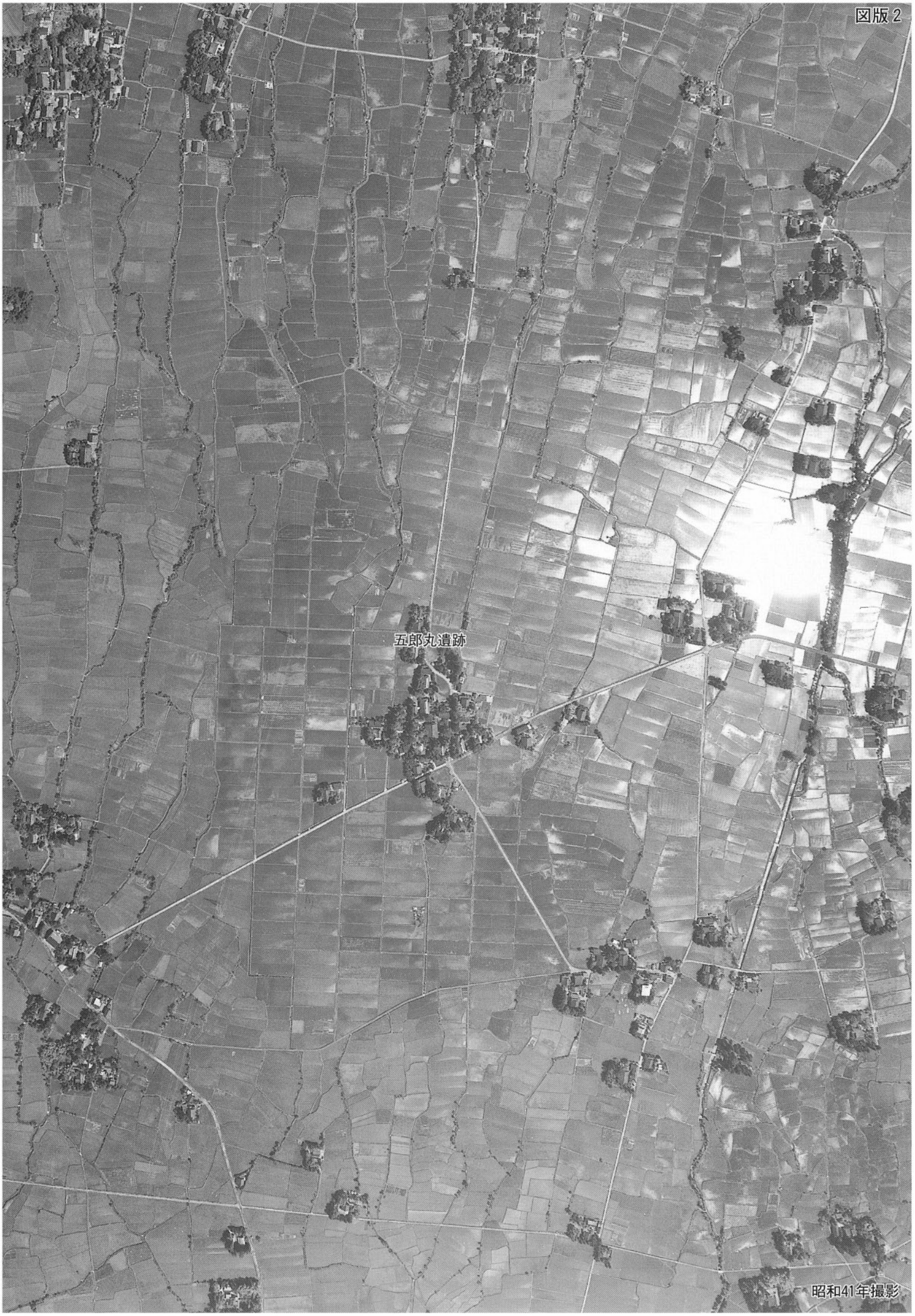
ヤ　安田良栄　1977 「郷土のあけぼの」『立山町史』上巻

山本正敏　1990 『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編５－境Ａ遺跡　石器編』 富山県教育委員会

ヨ　吉岡康暢　1971 「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』第56巻第４号　日本考古学会

図版 1

図版 2



図版 3

第 2 次調査
調査区全景
（上から）

第 3 次調査
調査区全景
（上から）

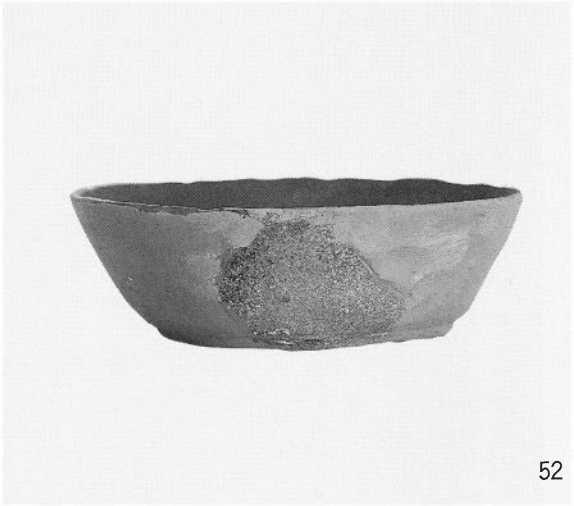
図版 4

遺物写真

9．流路 1

その他．包含層

9



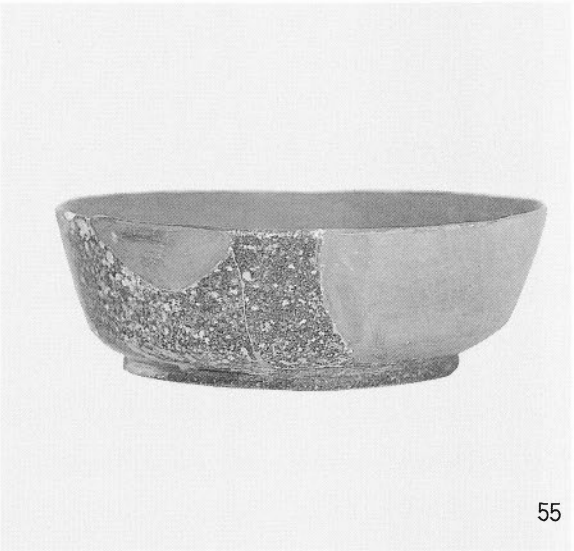
52

53

13

54

19



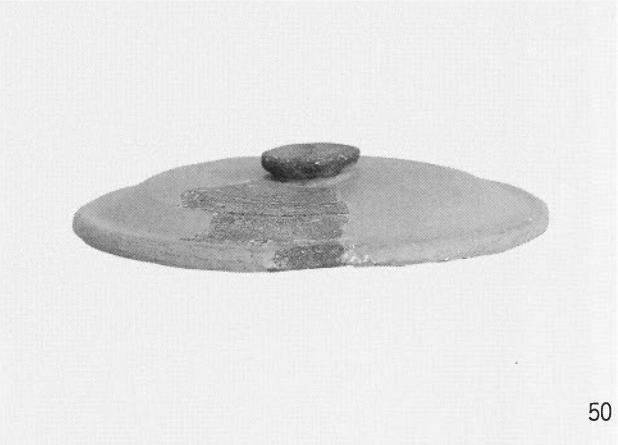
55

図版 5

遺物写真

50. 表採
62. 流路 1
その他. 遺物包含層

34


50

56

57

62

64

85

図版 6

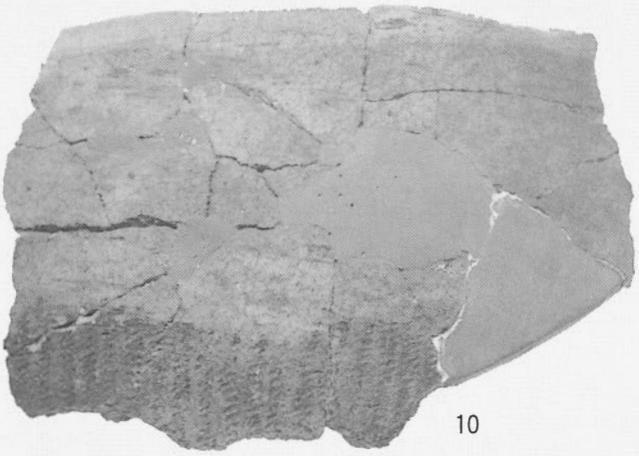
遺物写真

8・11．流路 1
その他．包含層

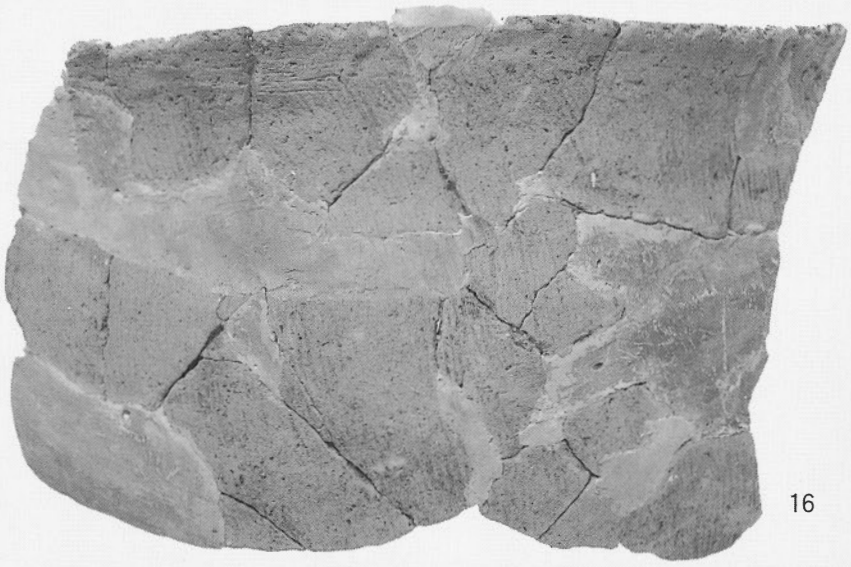
図版 7

遺物写真

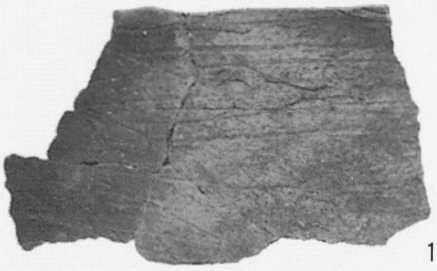
包含層



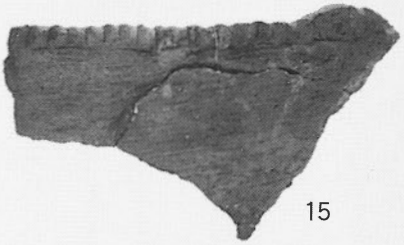
10



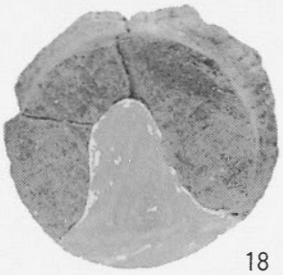
16



14



15



18

17

図版 8

遺物写真

20・21・24．流路 1
その他．包含層

20

21

24

25

22

23

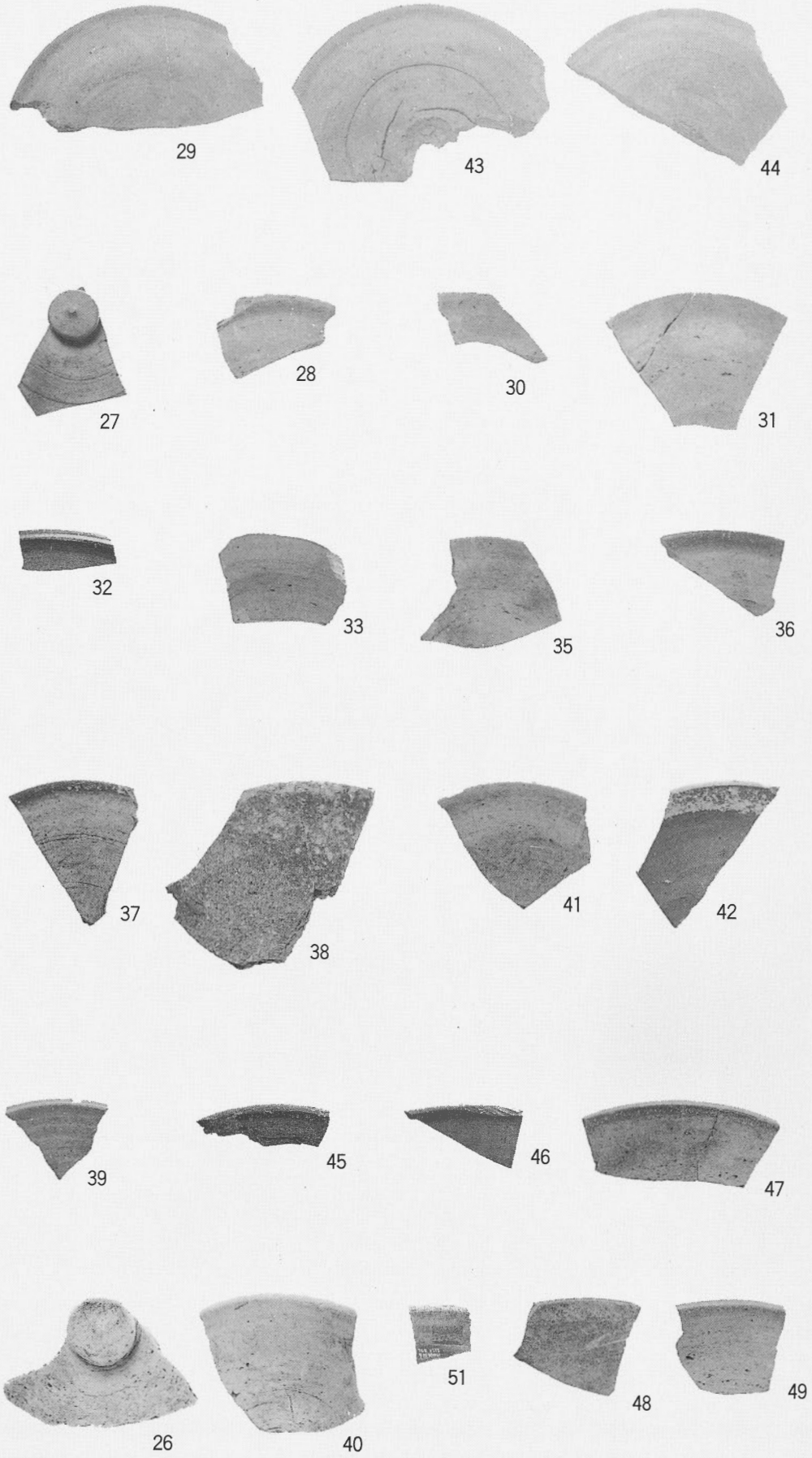
図版 9

遺物写真

32．流路 2

33．SK01

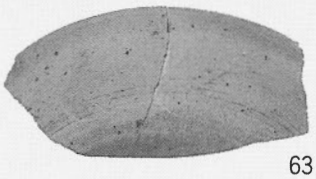
その他．包含層



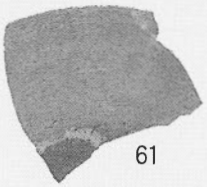
図版10

遺物写真

包含層



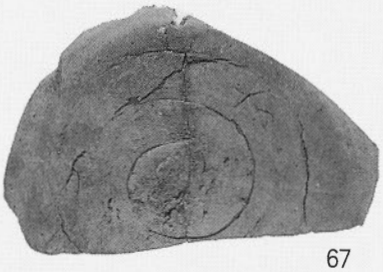
63



61

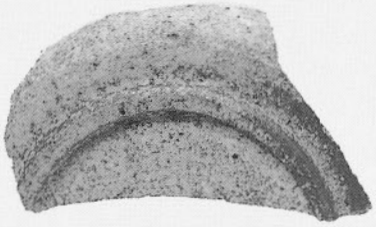
59

66

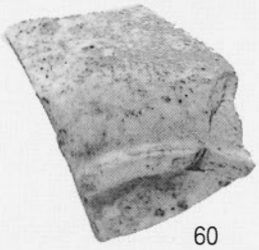


67

65



58



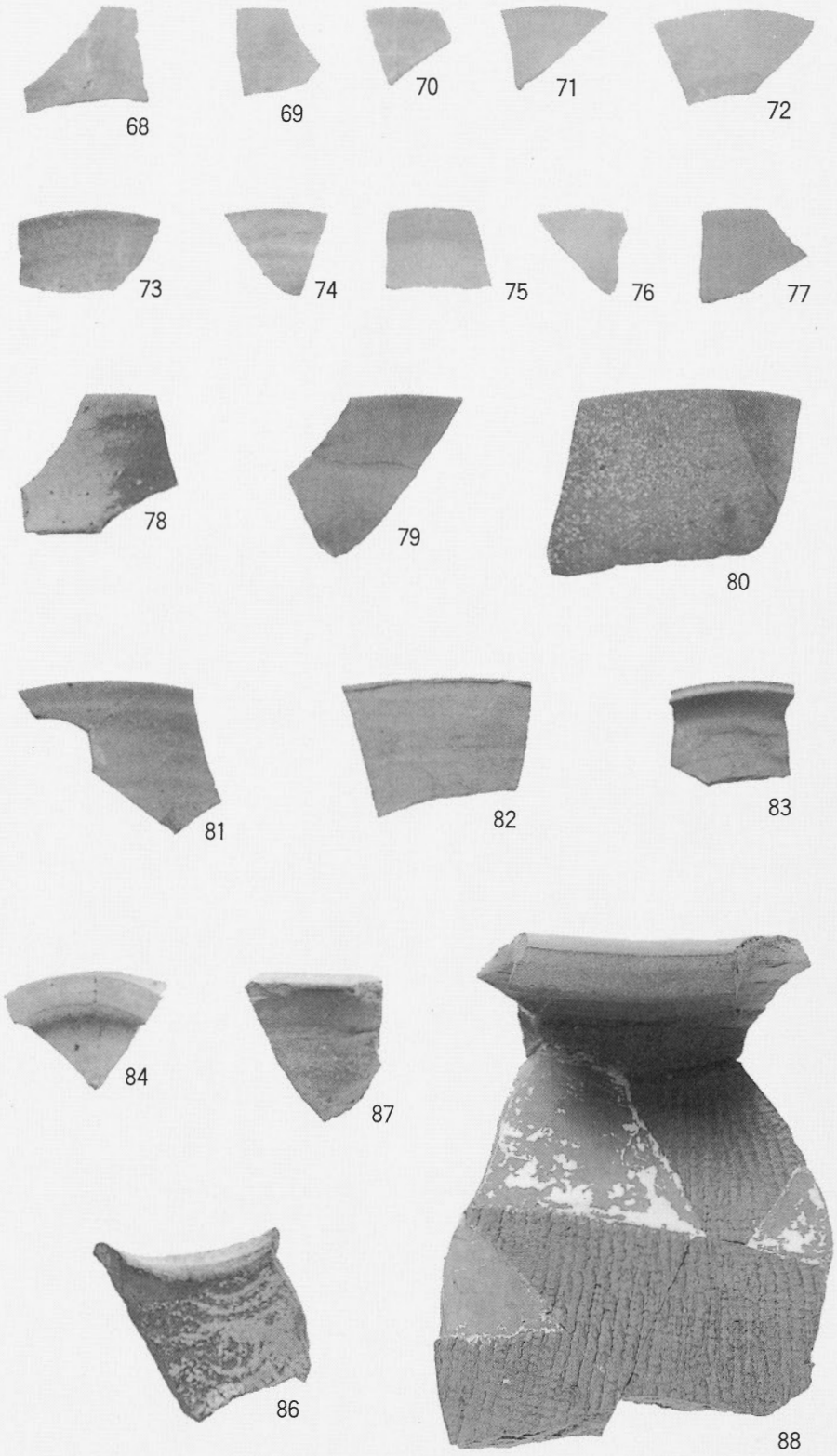
60

図版11

遺物写真

74．流路２

その他．遺物包含層

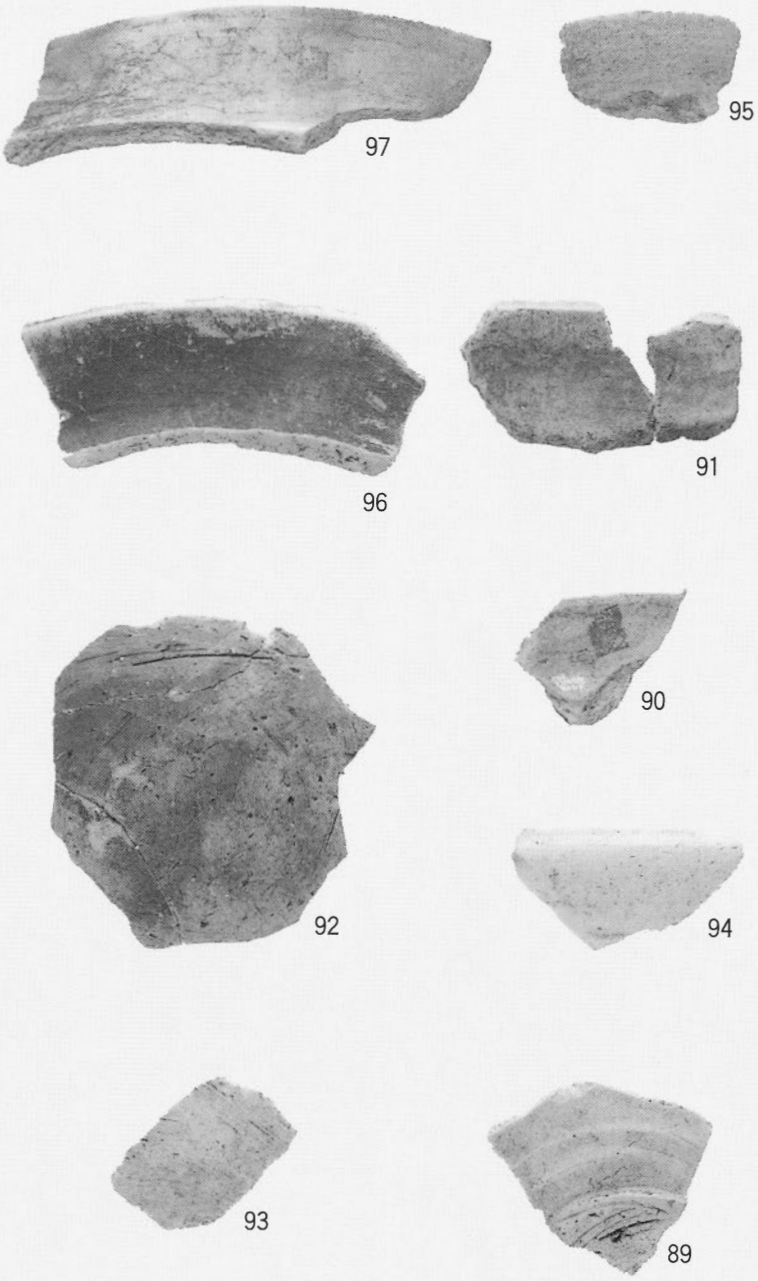


図版12

遺物写真

93．流路 2

その他．包含層



図版13

遺物写真

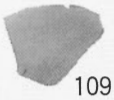
包含層

101

99

100

105


109

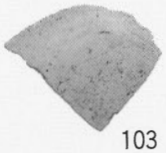
104

107

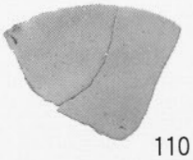
98

108

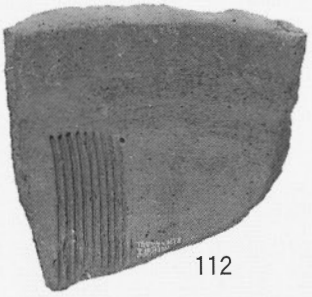
102

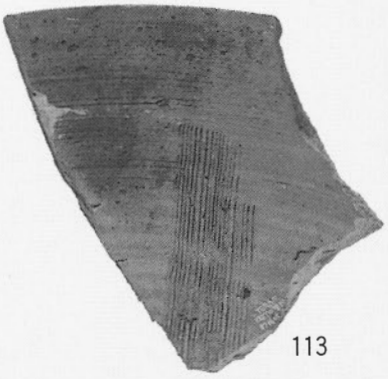

103

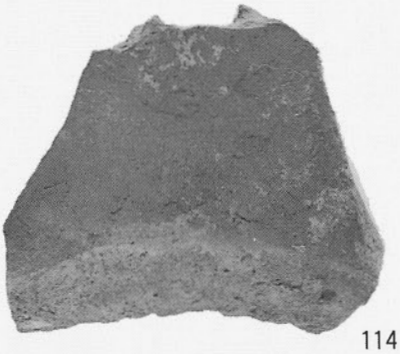
106


110

111


112


113


114

報告書抄録

ふ り が な	ごろうまるいせき
書　　名	五郎丸遺跡
副　書　名	立山町五郎丸第２企業団地造成事業に伴う発掘調査
編 集 者 名	三鍋秀典、新本真之、田中幸生
編 集 機 関	立山町教育委員会
所　在　地	〒930-0221　富山県中新川郡立山町前沢2440番地
発 行 機 関	立山町教育委員会
所　在　地	〒930-0221　富山県中新川郡立山町前沢2440番地
発行年月日	西暦1999年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ　ー　ド		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
五郎丸	富山県中新川郡 立山町五郎丸	323	012	36°40′55″	137°18′13″	19961111～ 19970804	3800	企業団地造成 事業に伴う

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五郎丸	集落跡	縄文・古代・中世	穴・流路	縄文土器・石器・土師器 須恵器・土師質小皿	

五 郎 丸 遺 跡

―立山町五郎丸第２企業団地造成事業に伴う発掘調査―

立山町文化財調査報告書　第30冊

発　行　日　平成11年３月31日
編集・発行　立山町教育委員会
印　　刷　ヨシダ印刷株式会社